

タイトル：2025 年度 教育セミナー（第 21 回）

日時：2025 年 9 月 18 日（木）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

「パレスチナ文学における農民性の標準化とベドウィンの不在—アダニーヤ・シブリー『とるに足りない細部』にみるオルタナティブなナクバの物語」

溝川貴己（早稲田大学大学院）

私にとって中東・イスラーム教育セミナーは、修士課程に所属する全国の同世代の皆さんと顔を合わせる数少ない機会であり、同時に他分野の先生方や学生の皆さんから自分の研究活動を批判してもらえることができる貴重な場でした。お忙しい中、長期間にわたって運営を担ってくださった皆様に心から感謝申し上げます。

中東・イスラームという軸はありますが、参加者の皆さんは様々な分野から集まっており、研究対象や手法も様々で、発表から多くの刺激を受けました。とりわけ、修士論文提出前の 2 年生の皆さんの発表を聞いたことは、自分の研究の方針を見直すうえでとても参考になりました。交流会や打ち上げなどお互いの話や研究の悩みについて話すことができたのも、とても良い思い出です。

今回は参加者が多く、一人当たり 40 分（発表時間は 20 分から 25 分）という時間制限の中で行われましたが、むしろ時間制限があることで、発表において限られた時間を使って何をどう伝えればいいのかを学ぶことが出来たように思います。また、多くの分野の人が集まっていたので、前提知識を共有していない人にどう伝えればいいのか、その方法を皆さんの発表から学ぶ機会にもなりました。

ゲストの先生方のお話からも多くを学びました。研究や人生について語っていただくことで、なぜ自分は研究をするのか、その根本的な部分を改めて問う機会

になったと思います。とりわけ、自分と分野の近い鷺見先生からお話を聞いたのは、とてもよかったです。黒木先生のコンティンジェンシーの議論も面白く拝聴しましたが、また別の機会があれば、黒木先生にも自身の研究人生を語っていただきたいと思いました。

自分は提出した発表要旨と内容を変えたばかりか、十全な準備もできずに発表に臨んでしまい、ただでさえ人数が多く時間が限られているにもかかわらず、皆さんの時間を無駄にしてしまったのではないかと、不甲斐ない気持ちでしたが、それでもなお皆さんから多くの指摘をいただくことができ、とても感謝しております。また、懇親会などでも、先生方から助言や励ましをいただくことができ、とても実りの多いセミナーになりました。

中東・イスラーム教育セミナーは、中東・イスラーム界隈の院生が全国から一堂に会する数少ない機会であり、情報交換や交流ができる貴重な場ですので、今後もこのセミナーが長く続いてほしいと思います。また、セミナーで出会った皆さんとの良い関係が今後も続くことを心から願っております。